

唯一の神がおられるだけ

I コリント 7 章 25～40 節

はじめに

7 章で結婚に関するコリント教会の質問に答えたパウロは、8 章から偶像礼拝の問題についての問いかけに答えることになります。家庭生活のことから社会生活の課題に移りますが、終わりの時を意識して「キリスト者の自由」、つまり罪から解放された者として互いに仕え合う生き方をするようにという原則は変わりません。また、コリントにはアクロポリスの女神アフロディテを祀る神殿をはじめ神々があまたあり、生贄が捧げられ、神殿には娼婦がいるというようなことも変わらない古代ギリシアの背景です。淫らな行いと偶像礼拝、その中でクリスチャンとしていかに生きるべきかが問われていました。日本に暮らす私たちにも他人ごとではない課題を、今日は 8 章の偶像に捧げた肉の問題から学びましょう。

1、愛と知識（1～3 節）

1 節「次に、偶像に献げた肉についてですが、『私たちはみな知識を持っている』ということは分かっています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。」

ここから始まるのは偶像礼拝本体の問題ではありません。偶像礼拝の周辺の問題です。コリントではアフロディテの神殿をはじめ、さまざまな神々に動物の生贄が捧げられていました。肉は祭司たちの取り分となり、それが市場にも出てくることが一般的でした。売られている肉には生贄として捧げられた肉が混じっていたので、コリントの信者たちの懸念の種になったのです。

それは使徒の働き 15 章に出てくるエルサレム会議の通達に以下のことがあったからです。「偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、淫らな行いを避けることです」（使徒 15 章 29 節）

これは偶像礼拝そのものに関わることの禁止でしたが、コリントでは商品として売られている肉の中に、はっきりわかるわけではないが偶像に供えたものがあるかもしれないという問題に関わることでした。

これに対してコリントの教会には「私たちはみな知識を持っている」ので、市場で売られている肉が偶像に供えたものかどうか心配しないでよいと考える人たちがいたようです。そういう人たちの意見がパウロに伝えられたのです。

知識とはすぐ後に出てくるように「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」という知識です。

この意見の人たちは、偶像に供えた肉が混ざっているかもしれないと心配して売られている肉を買わない信徒を責め、それは間違った信仰だと言って、そこに対立が生じていたようです。

これに対してパウロは、『私たちはみな知識を持っている』ということは分かっています。」と、彼らが言う「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」という知識はその通りだと認めます。

大事なのはその次です。「しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。」パウロは、「私たちはみな知識を持っている」という信徒たちに、それには同意するが、あなた方の知識はあなた方を高ぶらせている、と言うのです。

2～3 節「自分は何かを知っていると思う人がいたら、その人は、知るべきほどのことをまだ知らないのです。しかし、だれかが神を愛するなら、その人は神に知られています。」

コリントの人々は、かつては神を知らなかったのですが、神を知るようになりました。いや、神に知られるようになりました。これは大きな変化です。そして神を知り、神に知られることは、本来 神ではない神々から解放されることでした。このことに関する大切な教えがガラテヤ 4 章 8～9 節（379 頁）にあります。

「あなたがたは、かつて神を知らなかったとき、本来神ではない神々の奴隷でした。しかし、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうして弱くて貧弱な、もろもろの霊に逆戻りして、もう一度改めて奴隷になりたいと願うのですか。」

ですからコリントの人たちが「私たちはみな（神についての）知識を持っている」と言ったのは、その通り、幸いなことでした。しかし、その知り方が課題でした。「その人は、知るべきほどのことをまだ知らないのです」というところは、直訳すると「その人はまだ知るべき仕方で知っていない」です。知識が足りないのではなく、知り方が違うのです。神についての知識がその人を高ぶらせるような知り方ではなく、神を知ることが人を愛するような知り方こそ、望ましい知り方です。

「愛は人を育てます」、第 3 版では「愛は人の徳を建てます」と訳された言葉は、オイコドメオー、もともと建物を建てるという意味ですが、人の徳を建てる、新改訳 2017 では「愛は人を育てます」と訳されています。パウロが好んで使うことばです。

パウロはこう言いたいのです。つまり、まことの神を知り、偽りの神々から

解放されたなら、偶像に供えた肉が混ざっているかもしれないと心配して売られている肉を買わない信徒を責め、教会に分裂を招くのではなく、そういう人たちの信仰のある意味の弱さを受け入れなさいと言っているのです。

2、 知識の内容について（4～6 節）

4 節「さて、偶像に献げた肉を食べることについてですが、『世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない』ことを私たちは知っています。」

「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」という言葉をカッコに入っているのは、コリントの教会で神を知る知識ゆえに、その肉が偶像の神に捧げられたかどうかなど心配する必要はないと言う人たちが、このように言っていたという理解です。パウロは、これに同意します。

ここ市川市には、市川市文化国際部文化芸術課のホームページによると 64 の神社があるようです。平田には建御名方命（タケミナカタ）を祀る諏訪神社があります。日本全国には 2500 の諏訪神社があり、その総本社が御柱祭の諏訪大社です。アマテラスオオミカミとトヨウケビメを祀る伊勢神宮は、明治政府により全国の八百万の神々の最高位に位置づけられました。しかし、「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」のです。神社には神をかたちにした偶像はないのが一般的です。諏訪大社の神体は自然ですし、伊勢神宮の神体は八咫鏡、奈良県の三輪神社は三輪山を神体としています。ですから神道には偶像がないのでキリスト教に近いとも言えます。しかし、決定的な違いは、天地万物を造られた神ではなく、神に造られた被造物を神としていることです。

古事記の最初にアメノミナカヌシという神が出て来ますが、この神は以後出て来ませんし、これを祀る神社ありません。アメノミナカヌシ、タカミムスビ、カミムスビは造化三神と言われて、これが聖書の神であるというようなことが、まことしやかにキリスト教の側からも神道の側からも言われたことがあります。しかし、神と自然を創造者と被造物として明確に分けるキリスト教と、自然を神とする日本思想の違いをとらえないといけません。

しかし、「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」という知識があるからと言って、神ならぬものを神としていることを馬鹿にしたり、あざ笑ったりするのはいかながなものでしょうか。自然に目を留めて、自然を造られた神を知らないことを蔑むようなことではなく、そのような人の知識がまことの神にまで至ることを論し祈るのが私たちの役割です。

とは言え、パウロはアテネの街が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを覚ええました。Ⅰコリント 10 章 20 節には「彼らが（偶像に）献げる物は、神にではなくて悪霊に献げられていると、と言っているのです」という厳し言葉あります。神ならぬものを神としていること、まことの神を神としないことは罪であり、悔い改めなければならないことです。

続く 5～6 節には、キリスト教の神信仰の真髓が語られています。これは古代の教会でいつも語られていたこと、信仰告白、賛美のことばではなかったか、と考えられています。5 節「というのは、多くの神々や多くの主があるとされているように、たとえ、神々と呼ばれるものが天にも地にもあったとしても」、ここまでが前文です。

そして本文は、6 節「私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、この神から（起原を表すギリシア語の前置詞「エク」）すべてのものは発し、この神に私たちは至る（目標・目的を表すギリシア語の前置詞は「エイス」）からです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、この主によってすべてのものは存在し、この主によって（仲保・媒介を表すギリシア語の前置詞は「ディア」）私たちも存在するからです。」

聖書は、「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」と言っていて、あれもこれも皆だめだ、と言うものではありません。むしろ、それは逆でありまして、「私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、この神からすべてのものは発し」するのだということです。天地の創造者である神がすべての起原なのです。そして「この神に私たちは至る」のです。

そして、仲保者であられるイエス・キリストへの信仰であらう。

「また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、この主によってすべてのものは存在し、この主によって私たちも存在するからです。」

おわりに

今日は「唯一の神がおられるだけ」と題して、8 章の冒頭を学びました。偶像をめぐる問題は、このあと 9、10 章にまで続くのですが、その最初のところの大切なところを学びました。「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てる」ことを心に刻みましょう。6 節をもって神を賛美し、この福音に生きて参りましょう。「私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、この神からすべてのものは発し、この神に私たちは至るからです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、この主によってすべてのものは存在し、この主によって私たちも存在するからです。」